

この本の見方

5人の女性たちの伝記を生年順に掲載しています。

タイトルのページ

人物の名前
肩書
生没年
人物紹介
キャラクター
「言葉」を掲載しています。

人物の「言葉」を掲載しています。

「九転十起」
十度転んでも
一度起き上がるのです。

肩書
生没年
物語の導入の文章です。

コラムのページ

その人物に関連するテーマを解説しています。

その人物の伝記や著書、記念館などを紹介しています。

浅子のめざした女子教育と職業訓練
浅子は、明治時代の女子教育と職業訓練の発展に貢献した。この本は、浅子の生涯と業績を紹介し、その教育思想と職業観を明らかにする。浅子のめざした女子教育と職業訓練の発展に貢献した。この本は、浅子の生涯と業績を紹介し、その教育思想と職業観を明らかにする。

もっと知りたい！
浅子について詳しく知りたい方は、以下のリンク先をご覧ください。

これがわたしの生きる道！

日本の女性たち

2 教育・福祉に貢献した

目次

この本を開いてくれたみなさんへ
明治・大正・昭和時代の女性たち

目次

この本の見方

女性実業家として多くの事業を手がけた

浅子のめざした女子教育と職業訓練

知的障がい児の教育に力をつくした

石井筆子 1861—1944年

石井亮一と知的障がい児教育

女性の自立をめざし女性が学べる学校を開校

津田梅子 1864—1929年

明治時代の女子の学校教育

婦人参政権を獲得するために邁進した

市川房枝 1893—1981年

日本の選挙の歴史と婦人参政権

飢餓や戦争で苦しむ子どもたちのために活動する

黒柳徹子

ユニセフの活動

伝記を読み、考えてみよう

46

45

38

37

30

29

22

21

14

13

6

5

4

2

津田梅子



教育者

1864—1929年

女性の自立をめざし女性が学べる学校を開校

わずか六歳で日本初の女子留学生となり、幼いころからアメリカで幅広い教育を受けた津田梅子。女子に教育は必要ないと考えられていた明治時代の日本に、女性の学ぶ場をつくり、女性のための高等教育に全力を注いだ。

わたしは教育を受けた日本人女性だから、日本の女性のためになさねばならないことが本当にたくさんあるのです。

古木宣志子『津田梅子』より



新しい五千円札に描かれている女性を知っているだろうか。名前は津田梅子。女性が高等教育を受ける場がほとんどなかった時代に、その人生のすべてを女子高等教育の発展にさげた人物である。

梅子の夢だった、女性のための学校設立。その実現までの道のりは、わずか六歳で旅立ったアメリカ留学から始まった。

津田梅子は一八六四年、江戸牛込南町（今の東京都新宿区）で生まれた。父の津田仙は西洋の学問を学び、英語の通訳としてアメリカに行ったこともある、新しい考えの持ち主だった。政府が日本女性にも教育が必要だと考え、女子留学生をアメリカに派遣することを決めたとき、仙は梅子も留学生にと応募した。そして五人の女子が選ばれ、梅子は十年もの長い留学へと旅立った。

アメリカに着いた梅子は日本弁務使館で働くチャールズ・ランマンの家庭に預けられた。子どものいなかったランマン夫妻は、かしくて心の優しい梅子を大切に育て、最高の教育を受けさせた。

日本を出るときに梅子を知っていた英語は「サンキュー」「イエス」「ノー」程度だったが、必死で英語を学び、二年を過ぎるころには、長い詩を美しい発音で暗唱して周囲の人をおどろかせた。やがて小学校を卒業し、中等教育へと進むと、梅子は数学や物理などにも興味を広げ、夢中で学んだ。



*1 津田仙 江戸幕府に仕える武士だったが、英語を学び、幕府の通訳となつてアメリカに派遣された。明治維新後は農業を学び、西洋の農業技術を広めた。

*2 女子留学生をアメリカに派遣 西洋の文化を学ぶ梅子たち女子留学生は、岩倉使節団一行とともにアメリカに渡った。

*3 五人の女子 吉益亮子十四歳、上田梯子十四歳、山川捨松十一歳、永井繁子九歳、そして最年少の津田梅子六歳が日本初の女子留学生となった。

*4 日本弁務使館 一八七〇年にイギリス、フランス、アメリカなどに置かれた日本政府の出張所。現在の日本大使館にあたる。弁務使は、現在の外交官にあたる。

黒柳徹子



俳優・ユニセフ親善大使

飢餓や戦争で苦しむ子どもたちのために活動する

肖像写真撮影/ 下村一喜

ユニセフ親善大使として約四十年、世界の子どもたちの支援を続けてきた黒柳徹子。大好きだった小学校の校長先生の言葉が、今も徹子の背中を押している。

世界中の人が、「みんなで、いつしよに」と思うようになれば、戦争はなくなるはず。



俳優、タレントとして知られる黒柳徹子。

長年、ユニセフ親善大使としても活動し、飢えや病気、戦争に苦しむ子どもたちのもとを訪ねている。その生き方を方向づけたのは、小学校生活を送ったトモエ学園の教えだ。

黒柳徹子は東京生まれ。幼いころから好奇心におうせいな子で、それは学校のなかでも変わらなかった。六歳のとき、公立の小学校に入学した徹子は、授業中も窓の外が気になつてしかたなく、ちんどん屋さんを見つけると大声で呼んだりした。先生はおこり、入学からわずか数か月で徹子を退学にした。

母は徹子のために別の学校を見つけた。それがトモエ学園だった。トモエ学園の教室は、なんと古い列車の車両だった。なかに黒板や机があり、みんなそこでその日自分のしたい勉強をしていた。徹子はひと目でこの学校が

好きになった。でも、もっと好きになったのが校長の小林先生だった。小林先生は、徹子を「トットちゃん」とニックネームで呼び、いつもこう言ってくれた。

「トットちゃん、きみはいい子なんだよ。」

トモエ学園には、障がいのある子もたくさんいた。だが、障がいがあるからといって、その子たちが仲間はずれにされることはなかった。プールも遠足もいっしょだった。

「みんなで、いつしよにやろう。」

小林先生がいつもそう言っていたからだ。



*1 ユニセフ

親善大使

ユニセフ(国連児童基金)が支援する子どもたちの現状を多くの人に知ってもらうために活動したり、寄付を募ったりする役目がある。(→45ページ)

*2 小学校

徹子が入学した当時は尋常小学校といひ、六年制だった。

*3 トモエ学園

一九三七年、東京都目黒区に創設された私立の幼稚園・小学校。校長の小林宗作は音楽教育の研究者で、日本にリトミックを取り入れた。一九四五年の空襲で焼失し、廃校となった。

*4 ちんどん屋さん

派手な衣装を着て、楽器を演奏しながらまちを歩き、店などの宣伝をする職業の人。